

四季三葉 (四季三葉草)

へとうとうたらり たらりたらりあがり ららりとう へところ千代まで変らぬ色の みどりたつ春 まつの花 曾我菊の 名も翁ぐさそよやいづくの はなの滝 へれいれいと落ちて 水の月 素袍の袖も千歳の へ梅が香しとううぐいすも 初音床しきわが宿の 竹もすぐなるひと節に へうつして四季の三葉草 へ立舞う姿いとはえてへ桃は初心に柳はませた へ風のもつれに とけかゝる こちや海 棠つぼみのまよ うら山吹に若楓 藤色衣 ぬしとても かざす袂の桜狩 へその盃の 数よりも へおさへへ喜びありや喜びありやへ幸ひころろに任せたり へ千早振る 神の昔に あらなくに へ卵の花垣根白浪の 渚のいさご さくくとして あしたの花の富貴ぐさ へ女子ごころはしゃくやくに 思ふたばかり姫百合の へまだ葉桜も染めぬのに そりやあんまりな梨の花 気も石竹に軒の妻 へ菖蒲も知らで折添へて いつか手生けの床の花 へもとの座敷へおもくとおなおりそうらへ へようがましや へさはらば一枝参らしようへそなたこそ へ君が由縁の色見草 うつろう水にかきつばた 池のみぎわに鶴亀の へ縁し嬉しき踊り花 へ女郎花 宵の約束小萩がもとで 尾花招けばいとすき 通ふ心の百夜草 こちやへ真実いとしらし そうぢやいな しほらしや へ時雨の紅葉寒菊や 水仙清き枇杷のはな 花の吹雪の さらさらさと 山茶花や 恵みに花の 勲しは 千代に八千代の玉椿 眺めつきせぬ花の時 今も栄えて清元の 治まる 家とぞ祝しける。